

マルコにおける最後の癒しの出来事である。ここで注目すべきは、「癒し」に見とれるのではなく、「キリストに従う」とはどういうことかに注目すべきである。10章全体を見ると、テーマは「キリストに従う」ということになる。

(1)「離縁について教える」の内容で、ここも一つの見方として神との出会いを大事にし、「神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」のであり、それが「キリストに従う」ということになる。(2)「子供を祝福する」話は、子どもたちを排除する弟子たちの行為を叱って、「子供たちをわたしのところに来させなさい」と、小さいものを受け入れていくこと、そこに目を向けていくこと。それが「キリストに従う」ということであると教える。(3)「金持ちの男」の話では、男は「永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか」と尋ねる。自分の努力、力、金で永遠の命、神の国を手に入れようとする。イエスは「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」と伝える。弟子らは驚いて「それでは、だれが救われるのだろうか」。イエスは「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ」と言う。「キリストに従う」とは、神を信じ委ねることであり、自分の努力の結果ではないということ。(4)32節からは、エルサレム途上での話。いよいよ十字架へと向かう。イエスの三度目の死と復活の予告がある。しかし弟子たちは、イエスの十字架には向き合わない。弟子たちが考えていたのは、自分たちの豊かさ、権力であった。イエスは言う「あなた方の中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい」と教えた。それが「キリストに従う」ということ。

そして盲人の癒しの話になる。弟子たちは物乞いである者を排除しようとする。ここは13節以下にある子どもたちの排除と似ている。イエスに近づく子どもたちを叱ったように、ここでも弱者に対する態度が問われている。その中で盲人は、イエスに呼ばれて「上着を脱ぎ捨て、踊り上がってイエスのところに来た」。その日暮らしの物乞いにとって、持ち物といえば、唯一身に着けている上着であろう。イエスに呼ばれたとき、彼はまさに最後の持ち物、財産を捨てて躍り上がってイエスの前に入る。あの「金持ちの男」はどうか。多くの財産を持っているがゆえに投げ出すことが出来なかった。

イエスは盲人に「何をしてほしいのか」と問う。この人が「何をしてほしいのか」は明白である。しかしイエスはあえて聞いているのは何故か？ ここには深いイエスの問いがあると思う。イエスは盲人バルティマイに、「もうあなたは見えているではないか。あなたは私が見えているではないか。あなたは私がキリストとして見えているではないか。それで、『何をしてほしいのか』・・・」イエスはそうおっしゃったのではないか。私たちは、「キリスト」が見えているか？(神谷)